

令和6年度 吉川市立関小学校 学校公開用

この学校評価は、学校の現状やこれまでの努力とその結果を公表し、家庭・地域にお知らせするとともに、今後の取り組みに向けて家庭・地域の理解や連携協力をお願いするものです。

No.	質問項目	自己評価	自己評価についての評価の説明及び学校の考え	学校関係者評価	評価に対する学校の説明・考察
1	学校は、学校教育目標の実現のため、様々な取り組みに努めている。	4	「ひとり立ちする子」の実現に向け、教育課程を見つめ直した。学びの主役は子供であることを全教職員が認識し、教育活動を充実させた。	3	児童が自分事と考え、自分で学び方を決める授業をさらに発展させ、学校教育目標「ひとり立ちする子」の実現に向けて努力していく。
2	教職員は、PDCAサイクルのもと教科指導や学級経営・校務分掌にあたっている。	4	校長の経営方針のもと、教科指導や学級経営を重点的に実施した。学期ごとに実施状況を把握することでより効果的な教科指導・学級経営を行うことができた。	3	「子供たちのことを考えてくれている」という保護者からの声が挙がり、日頃の教職員の教科研究や授業準備、評価方法等の成果があらわれていると考えられる。
3	学校は、事故やトラブルに対してのマニュアルを作成・掲示し、迅速に対応できる体制を整えている。	4	危機管理マニュアルを年度当初に全教職員で確認した。危機管理意識を高めるため、教職員研修を2回実施した。全教職員が万が一に備え、迅速に行動できる体制を整えた。	3	校内の多くの場所に避難経路図や消火器が置かれていたこと、避難訓練等の実施状況について理解をいただいた。災害等の発生時に備え、全教職員で迅速に対応できる準備を引き続き実施していく。
4	学校は、清掃活動や掲示物等に力を入れるなど、組織的に環境美化に努めている。	4	校門付近及び校内の掲示板に季節感を感じることができるとともに、豊かな心を育成した。また、「黙勤清掃」を児童一人一人が心がけ、組織的に校内美化に努めた。	3	児童が熱心に清掃活動をしている様子をホームページ等で紹介した。本校が取り組む「黙勤清掃」への理解が深まった。引き続き、児童自ら校内美化への意識が高まるようにしていく。
5	学校は、小中の連携を図り、小中一貫教育を推進している。	4	「主体性の育成」の目標達成に向け、小中一貫で授業改善を行った（小中研修会2回実施）。また、6年生が年3回中学校を訪問し、中学校の先生から直接授業を受けた。	3	小中一貫教育の目標である「主体性の育成」について、ホームページで紹介し、取り組み方法について周知した。今後は成果について取り上げ、更なる小中一貫の取組への認知を広げていく。
6	教職員はPTA活動や地域の活動に積極的に協力し、地域の人材を活用した学習活動を積極的に進めている。	3	11月に「ちよこっとボランティア（今年度はトイレ清掃）」を募り、30名以上の協力者のもと、トイレをきれいに整備することができた。また、PTA協力のもと、運動会や持久走大会も安全に実施することができた。	4	運動会や持久走大会、2年生の生活科「まち探検」の引率等、多くの場面で保護者・地域から協力を得ることができた。社会とともに歩む学校づくりが実現できた。
7	学校は、学校の様子や成果を「学校だより」やホームページ等を活用し、積極的に情報提供している。	4	学校だより校長の経営方針や学校の取組等を掲載した。教育活動への理解を得た。また、ホームページの更新を週2回以上実施し、児童の活動の様子を広く周知した。	4	学校だよりやホームページ、各学級だよりで日頃の教育活動の取組や児童の様子を広く発信することができた。ホームページ閲覧総数は66万件を超えた。
8	学校は地域の人材を活用するなど、保護者と地域が連携した教育活動を推進している。	4	学校応援団として、読み語りや学習支援等を実施した。保護者や地域の協力を得ながら充実した教育活動を行うことができた。	3	読み読みの活動や学習活動ボランティアの取組をホームページ等で取り上げ、周知した。保護者・地域が連携した取組を充実させることで豊かな教育活動が展開できた。
9	児童生徒は、落ち着いた学習に取り組む、学習内容を理解しようとしている。	3	学習内容を深めるため、児童自ら学習の場を選んだり、学びの成果を自分の言葉で振り返ったりすることができた。	3	保護者から「徐々に学習に取り組む姿勢が向上している」との声が挙がった。教職員の強い指導の成果があらわれていると考えられる。引き続き、学習内容が理解できるよう授業改善に取り組んでいく。
10	教職員は、学力向上を目指し、PDCAサイクルのもと、児童生徒の実態に基づいた授業改善に努めている。	4	「学びの主役は子供である」と捉え、全教職員が総力を結集して児童の学びを支えた。学期ごとに校内研究授業を取り入れ、児童の実態を的確にとらえた授業づくりを行った。	4	学力向上に向けた家庭学習の取組をはじめ、授業をさらによりよくするための児童理解や授業研究に取り組んだ教職員の姿勢が保護者に伝わっていると考えられる。
11	教職員は一人一台端末を積極的に活用し、ICT活用を推進している。	4	情報端末や大型TVを効果的に活用し、児童の深い学びにつなげることができた。外国語から日本語に翻訳して対話につなげた事例もみられ、ICTの活用方法が広がった。	4	授業や家庭学習において広く活用させ、ICT機器の利便性や効率性について広く認知された。今後も情報モラルを高め、効果的に活用を進めていく。
12	学校は学習ルールを定めて授業を進めるなど、共通理解のもと指導にあたっている。	4	学習の振り返りや児童のつぶやき、感想をもとにした学習課題を設定した。児童自ら考える場面では、友達と考える、一人で考える、先生と考える場を設定し、自分に合った学び方を選ぶことができた。	4	保護者からは「有意義で楽しい授業が行えている」との評価を得た。引き続き、児童と対話を重ね、主体的な学びが進むよう支援していく。
13	児童生徒は、友達や教職員・来校者に進んであいさつをしたり、正しい言葉づかいをしたりすることができる。	3	多くの児童が友達や教職員・来校者に進んであいさつをしたり、正しい言葉づかいをしたりすることができた。引き続き、規律ある態度の実践を自分事として捉えられるよう支援を続けていく。	3	保護者から「大人側があいさつをしやすい雰囲気をつくったり、大人から挨拶をしたりすることも必要ではないか」との声が挙がった。子供も大人と一緒に気持ちのよい挨拶ができる学校づくりを目指していく。
14	児童生徒は学習のルールや生活のきまり・時間を守ることができる。	3	毎月の生活目標を意識し、学習のルールや生活のきまり、時間を守ることができた児童が増えた。引き続き、学校のきまりについて児童と対話を重ね、自律を支えていく。	4	保護者から「学校生活を通して、自宅でも時間やきまりを守る習慣が身につけてきていると感じる」との感想が挙がった。日頃の指導が家庭生活でも生かされていることがうかがえた。
15	児童生徒はいじめや意地悪な行為をすることなく、お互いのよさや努力を認め合って、学校生活を送っている。	3	楽しい学校生活を過ごすために自分は何ができるかを考え、いじめ防止を自分事として捉える児童が増えた。児童自ら多様性を認め合い、豊かな人間関係づくりが構築できるよう引き続き支援していく。	2	児童一人一人がよい学校をつくり上げる当事者として、互いのよさや努力を認め合う必要性が考えられる。児童の発達段階を捉えた指導を充実させ、児童の自律を支援していく。
16	教職員は自ら手本となるなど、児童生徒に対して規範意識を高める指導を行っている。	4	児童と対話を重ねることや自律を促す言葉がけを教職員が行ったことで規範醸成された。引き続き、子供の模範となるよう努めていく。	4	保護者から「教職員も保護者も“子供は大人をよくみている”ことを意識して過ごしていく必要がある」との感想が挙がった。大人自ら子供の模範となるよう引き続き努めていく。
17	児童生徒は、体力向上に向け、体育の授業や部活動または外遊びに意欲的に取り組んでいる。	4	「コツコツと きたえたらからだは たからもの」の合言葉のもと、児童個々が自分の目標を捉え、楽しみながら運動に親しむことができた。休み時間においても外遊びを楽しんだ。	4	保護者から「運動好きの子が多い」「朝ラッソンや体育等、体を動かす習慣ができてきている」との声が挙がった。運動に親しみ、楽しく体力を高めることへの意識が高まっていることがうかがえた。
18	学校は、生徒の健康管理および食育に関する意識を高めようとしている。	4	健康観察アプリ（リーバー及び心音）を活用し、心身ともに健康な生活を送る意識を高めた。給食指導においても栄養教諭と連携し、栄養についての理解を深めた。	3	「好き嫌いをなく食べてほしい」との声が挙がった。保護者も食育への関心が高いことから、引き続き食育指導を進めていく。児童が健康づくりを自分事として考えらるよう支援していく。
19	学校は、児童生徒の立場に立ち、一人一人の思いや願いを大切に、児童生徒に寄り添った対応をしている。	4	児童一人一人の思いや願いを聞き、自己決定に寄り添った。児童との対話を重ねることに重点を置き、児童の「ひとり立ちする力」を全教職員で支えた。	3	保護者から「子供への声掛けや接し方など、子供ファーストで対応いただけている」との声が挙がった。児童に寄り添った対応が安心安全な学校づくりにつながっていると考える。
20	学校はいじめや不登校をなくすため、児童生徒の指導の充実を図っている。	4	いじめ防止基本方針を見つめ直し、全教職員で確認をした。いじめ防止に対し、組織を構築し、指導や支援を明確にした。様々な理由による不登校児童には、児童の思いや願いをよく聞き、理由の学びの場や学び方の選択を支えた。	3	「先生たちが共通認識のもと、いじめや不登校の解消に対応している」との声が挙がった。引き続き、児童との対話を重ね、「ひとり立ちできる子」の育成を目指していく。